

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲第 969 号	氏名	向山啓二郎
論文審査担当者	主査 本郷一博 副査 角谷眞澄・森泉哲次		

(論文審査の結果の要旨)

脊柱側弯症手術においては整容面の改善が重要であり、肋骨隆起の改善も重要な目的のひとつであるが、術後残存する症例も多数存在する。今回胸椎に主たるカーブが存在する Lenke type 1, 2 の思春期特発性側弯症患者に対する後方矯正固定術後肋骨隆起が残存する要素、また隆起の残存が患者満足度に影響するかを検討した。

対象は、direct vertebral body derotation (DVBD) を併用した skip pedicle screw fixation による後方矯正固定術を施行した思春期特発性側弯症 Lenke type1, 2 患者 40 例 (男性 2 例、女性 38 例、平均年齢 14.9 歳) であった。術前、術後に inclinometer を用いて apical trunk rotation(ATR)を測定し、hump の大きさの指標とした。対象患者は術後 ATR により A 群 (ATR \leq 10 度)、B 群 (ATR $>$ 10 度) の 2 群に分け、術前術後の各パラメータを比較した。患者満足度は SRS-22 の術後 self image、satisfaction の subscore を用い検討した。また、術中より大きな矯正を得るための Ponte osteotomy の追加が肋骨隆起の改善に影響するのかを検討した。

その結果、向山啓二郎は次の結果を得た。

- 術後の残存肋骨隆起の大きさに影響を与える因子は術前の肋骨隆起の大きさ、側弯の頂椎の回旋の大きさであった。カーブの大きさ、カーブの柔軟性など、他のパラメータに有意差は認めなかった。
- 術後残存する肋骨隆起の大きさでは術後満足度には有意な差が認められなかった。ATR 改善率と術後の患者満足度の間には有意な相関が認められた。また主胸椎カーブの Cobb 角、その改善率は術後 self image に有意な相関を認めた。
- Ponte osteotomy は肋骨隆起の改善には影響を与えていなかった。

これらの結果より、側弯症手術においては頂椎の回旋変形を取り除くことが術後の肋骨隆起を減じるために必要なことであると考えられた。また、術後残存した肋骨隆起の大きさそのものは患者の満足度や self image に有意な影響は与えず、ATR の改善率に影響されることが明らかになった。満足度は肋骨隆起の軽減のみが直接影響するものではなく、冠状面の矯正など、複数の因子が影響を与えていることが示唆された。よって、主査、副査は一致して本論分を学位論文として価値があるものと認めた。